

第9回平和首長会議総会

会議Ⅲ

若者の役割

2017年8月9日（水）13：45～16：15

長崎大学 中部講堂

モデレーター 中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）

来賓挨拶 河野 太郎（外務大臣）

加盟都市事例発表

ショーン・モリス（マンチェスター市首席政務調査官・イギリス）

ジョセフ・マヨラル（グラノラズ市長・スペイン）

阿部 更紗、近藤 風樺（広島市立広島商業高等学校）

江上 健太、岩本 花乃（長崎市立長崎商業高等学校）

若者の活動事例発表

山田 ゆり（ナガサキ・ユース代表团）

安野 伊万里（高校生平和大使）

阿比留 高広（京都外国語大学 NET-GTAS）





会議Ⅲ

グループワーク参加者

名 前	所 属
A 班 東京都 武蔵野市	
邑上 守正	武蔵野市長
柴田 進志	長崎大学（長崎）
野村 梨紗	長崎大学（長崎）
高橋 尚也	京都外国語大学（京都）
川嶋 大地	明治大学（東京）
トラン・フォン・タオ	立命館アジア太平洋大学（大分）
大久保 花音	広島女学院高等学校（広島）
B 班 フランス ヴィトリー・スールセーヌ市	
ジャン・クロード・ケネディ	ヴィトリー・スールセーヌ市長
福井 敦巳	長崎大学（長崎）
光岡 華子	長崎大学（長崎）
川瀬 由希子	京都外国語大学（京都）
鎌倉 巽	明治大学（東京）
山口 奈々	広島女学院高等学校（広島）
C 班 ベルギー イーペル市	
フィリップ・ディーガー	イーペル市平和部局長
酒井 環	長崎純心大学（長崎）
佐々木 朋哉	長崎大学（長崎）
下村 はず希	立命館大学（京都）
岩田 直輝	明治大学（東京）
田中 心	活水高等学校（長崎）
洪 秀有基	修道高等学校（広島）
D 班 メキシコ メキシコシティ市	
マリア・フェルナンダ・オルベラ・カブレラ	メキシコシティ市青少年局長
山田 ゆり	活水大学卒業（長崎）
浅田 晴香	立命館大学（京都）
キー・コスマス・ケン	立命館アジア太平洋大学（大分）
山戸 青	活水高等学校（長崎）
小西 佑弥	修道高等学校（広島）
E 班 カメルーン フォンゴ・トンゴ市	
ジーン・ポール・ナンファック	フォンゴ・トンゴ市副市長
北里 友佳	長崎大学（長崎）
阿比留 高広	京都外国語大学（京都）
大月 慎太郎	明治大学（東京）
関口 萌	聖和女子学院高等学校
後藤 泉稀	盈進高等学校（広島）
F 班 クロアチア ビオグラード・ナ・モル市	
ヤスミンカ・バリョ	ビオグラード・ナ・モル市参事官
中川 哲	長崎大学（長崎）
渡部 遥菜	明治大学（東京）
アマンダ・マクドナルド	長崎県立大学（長崎）
安野 伊万里	長崎東高等学校（長崎）
高橋 悠太	盈進高等学校（広島）

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：ただ今から会議Ⅲ「若者の役割」を開会いたします。私はモデレーターを務めます、長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子です。皆さん、どうぞよろしく願いいたします。

さて、この会議Ⅲは、平和首長会議としては非常に新しい試みとなります。もちろんこれまでも平和首長会議は、世界の若者の取り組みを応援してくるということはしてこられたのですが、この会議においては、それをさらに一歩前に進める形で、未来に向けて世界の首長と日本全国から集まった若者が力を合わせて、実現可能かつ夢のある平和活動の企画案づくりを一緒に行う、そして、その成果をここにいらっしゃっている皆さんと一緒に共有するというのを会議の後半に予定しています。若者ならではの創意あふれるアイデアが、これから世界の各地で花開き、実を結んでいく、本日、長崎が被爆72年を迎えた日とその記念すべきスタートになることを期待しています。

では皆さま、若者の、そして首長の取り組みを一緒に見守って、応援してってください。それでは、プログラムに入っていきたいと思います。まず、ご来賓の河野太郎外務大臣からご挨拶を賜りたいと思います。河野大臣、よろしく願いいたします。

(1) 来賓挨拶

河野 太郎（外務大臣）：皆さま、こんにちは。松井平和首長会議会長、ご列席の皆さま、広島選出の前岸田外務大臣の後を引き継ぎました外務大臣の河野太郎でございます。実は、就任以来、今日で7日目でございます。しっかり頑張っていかなければいけないわけでございますが、今日は第9回の平和首長会議総会にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

この会議が2013年に広島で開催された前回の会議に引き続き、核兵器の犠牲となったここ長崎にて世界各地からの参加を得て、開催されることを大変意義深く感じております。今日ご参加いただいている皆さまにおかれましては、核廃絶、そして世界の恒久平和の実現に向けて日頃からさまざまな活動にご尽力いただいていることに改めて御礼を申し上げたいと思います。

私が小学生だったころ、当時まだ若い衆議院議員だった私の父が広島、長崎の記録フィルムを持って、ワシントンとモスクワへ出掛けていき、それを両国で上映して帰ってまいりました。ちょうど冷戦の最中でもございましたので、原爆の記録フィルムを上映するというのに両国で賛成、反対、肯定的な意見、否定的な意見、いろいろあったようでございます。父が帰ってきて、その反応について私にいろいろなことを話してくれた、それを今でもよく覚えています。

そんなこともあって、私は初めて国会に当選したときから、国会の軍縮議員連盟の一員として活動をし、また、核軍縮・国際議員ネットワーク（PNND）という国際的な軍縮核廃絶に向けての議員連盟の日本代表として活動もさせていただきました。

言うまでもなく、日本はただ一つの戦争被爆国であります。核兵器の使用の悲惨さや平和の尊さについて、日本人、そして広島、長崎の両市の市民の皆さまは、どの国よりもよく知っています。この被爆の実相の正確な認識、「核兵器のない世界」という大きな理想の実現に向けて、国際社会が一丸となって取り組んでいくために、核兵器が使われたら実際に何が起きるかを認識してもらい、これがさ



会議Ⅲ

まざまな取り組みの土台です。広島、そして、ここ長崎の惨禍の状況を世代と国境を越えて受け継いでいくことが、わが国日本の大きな使命でございます。

今日の会議のテーマは「若者の役割」だと承っています。将来を担う若い皆さまが、核兵器の脅威を認識し、軍縮こそが、核廃絶こそが世界平和の実現に向けて不可欠であるという意識を高めていただくことは非常に重要だと思っています。その意味で、皆さまがこの被爆地長崎に、今日というこの日に集まって、日々皆さまが行っている活動を報告し、平和教育、平和活動に関する意見交換をされるということは大変意義深いことだと思っています。政府としても、皆さまの「核兵器のない世界」を実現するという思いを後押しするために、ユース非核特使という制度を立ち上げました。この取り組みをさらにしっかりと拡大してまいりたいと思っております。

今、核軍縮をどう進めていくかという進め方をめぐって、残念ながら核兵器国と非核兵器国は深刻な対立の状況にあると思っています。日本はただ一つの戦争被爆国として、非核三原則をしっかりと堅持しながら、この核兵器国と非核兵器国との間の橋渡しをしっかりと務め、両者間での信頼関係を再構築していかなければならないと思っています。そして、2020年の核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議を成功させるために、国際的な機運をもう一度高めていきたい、そう考えております。

こうした視点からも、より多くの政治的主導者、そして若い世代の方々にこの長崎、そして広島を訪問していただけるように、積極的に努力していきたいと思っております。前の岸田外務大臣のリーダーシップの下、例えば、包括的核実験禁止条約（CTBT）の地域会議を開いてまいりました。去年はこのCTBTにミャンマーが参加し、今年、最後に東南アジアで残っていたタイがCTBTに加わろうという雰囲気になっています。まだまだ道のりは遠くはありますが、着実に一歩ずつ、後戻りすることなく前へ進めていく。CTBTに、ロシア、イギリス、フランス、こうした核兵器国は加入してくれていますが、まだまだ残っている国もあります。しかし、そういう中で、例えば、この地球上のどこかで実験が行われたときに、それをきちんとモニタリングするシステムが多くの国の協力で構築されようとしています。そうした取り組みを日本はしっかりと先頭に立って後押ししてまいりたいと思っております。

核兵器のない世界の実現のためには、政府だけでなく、多くの市民の皆さん、国民の皆さん一人一人がそのために何ができるか、あらゆる側面から考え、行動していくことが大切だと思います。そうした活動の積み重ねが核軍縮の機運を高めていくことにつながるのです。この平和首長会議の活動は、まさにそのための取り組みであり、この会議がさらなる発展をしていくことを切に願っております。

最後に、今回で9回目を数えるこの総会に、日本だけでなく世界各地から集まってくださった皆さまに改めて感謝を申し上げますとともに、「核兵器のない世界」の実現のために皆さまとともに着実に歩みを進めていく、そうした私の固い決意と覚悟を申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。次の世代の皆さん、長崎、広島をしっかりと受け継いで、前に進んでいっていただきたいと思っております。どうもありがとうございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：河野外務大臣、ありがとうございました。力強いスピーチに、これから演台に立つ若い人たちも力付けられたことだと思います。

続きまして、若者の平和活動について、平和首長会議加盟都市首長に事例発表を行っていただきたいと思います。各都市、7分以内でお願いします。

(2) 第1部

①加盟都市事例発表

中村 桂子 (長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授)：まず、英国・マンチェスター市の取り組み事例の発表をショーン・モリス主席政務調査官をお願いいたします。

ショーン・モリス (マンチェスター市主席政務調査官・イギリス)：たくさんの若い方がいらっしゃるなどびっくりしています。こんにちは。ショーン・モリスと申します。マンチェスター市議会の主席政務調査官を務め、また、英国・アイルランド非核宣言自治体協議会、そして平和首長会議支部の事務局を務めています。

(以下スライド併用)

今日お話ししたいのは、マンチェスターがどのようにして核兵器のない世界という運動を行ってきたのか、また、子どもたちにどのような教育活動をしてきたのかというお話です。これまでの「核兵器のない世界」に向けた英国・アイルランド支部、そして国際的な取組みにおけるマンチェスター市の役割について話をしたいと思います。マンチェスターの非核運動、Nuclear Free Local Authorities (NFLA) という英国・アイルランドの非核自治体協会での活動、そして平和首長会議のリーダー都市としての取組みについてです。

また、プロジェクトGという新しいプロジェクトを開始しています。被爆者の方たち、そして広島、長崎の支援として行っていく新しいプロジェクトです。そのプロジェクトGがどのように進んできたか、平和教育、そして将来の展望の話をします。

まだ生まれていなかった人もいますが、1980年に私たちの組織が生まれたころは、アメリカ、ソ連が対峙した時期です。冷戦といわれる時代でした。英国では核兵器が基地に配備されていました。マンチェスターは街が攻撃されるのではないかと、核兵器で攻撃されるのではとても不安に感じていました。そこで、マンチェスター市議会は、非核都市になるという宣言をしました。実は世界で初めての非核都市宣言でした。

何百もの自治体が後に続きました。マンチェスターの市役所の正面には、37年間にわたって非核運動に取り組んできたことを示す銘板が飾ってあります。平和教育活動を行う中で、平和の庭というものをつくったり、核兵器の攻撃が人々に何をもたらすのか伝えたり、国際的な働き掛け、ロビー活動も行ってきました。

平和首長会議が始まる2年前に活動を始めました。「NFLAでやっていっしょなことは、私たちが考えている組織のひな形になる」ということを広島の前市長に言っていただいたことがあり、うれしく思っています。1984年に平和首長会議ができ、そして加盟をし、2001年には副会長都市の任務を託



会議Ⅲ

されました。

いろいろと写真を持ってきました。写真の方が分かることが多いかと思います。私たちがこれまでやってきた非核自治体としての活動を示しています。

私たちは加盟してからずっと平和首長会議の会議に参加しています。子供を対象にした取組みに力を入れています。8年前、私も広島に来ました。

広島と長崎の原爆資料館を訪問しました。被爆地で何が起きたのかを英国全土に伝えたいと考えています。英国の外務大臣などともお会いしました。広島・長崎と一緒に国連を訪問し、潘基文前国連事務総長とも会見したことがあります。

さて、副会長都市として、私たちは平和首長会議の一員としてずっと会議に参加してまいりました。また、2011年には長崎市長がマンチェスターに来てくださいました。マンチェスターには博物館があるのですが、そこでヒロシマ・ナガサキ海外原爆展を行いました。写真には、広島、長崎についていろいろと講演をしている前市長、現市長の姿が写っています。

私たちは理事都市と緊密な関係を築いています。イーペル市のメニン・ゲートでの最後のセレモニーでマンチェスター市議会議員があいさつしている姿が写っています。イーペル市では毎日同時刻に実施されるこのセレモニーによって平和教育が取り組まれていると感じました。

世界を自転車で回るというツアーがありました。これはノルウェーの団体が写っています。ノルウェーの首相とマンチェスター市長を美しい市庁舎で写したものです。世界平和の推進の取組みとしてのスポーツ振興のいい事例です。

さて、私たちが支部を設立してからの活動のひとつが、日本のピースボートとの取組みです。ロンドンの国会議事堂でピースボートの皆さんと一緒にイベントを行いました。広島、長崎、被爆者の活動を紹介しました。真ん中にある写真については、1950年代の広島子どもたちが描いた作品を美術の先生から受け継いでいます。その作品はアメリカで開催されたUNESCO会議で展示され、その先生の手元に戻りました。そして昨年、市議会に寄贈され、今は、右下の写真にありますように、広島の小学校にあります。その学校の先生と生徒が写っています。独自の平和教育を示す一例だと思います。

では、あとの時間はプロジェクトGの話をしたと思います。これは苗木で、広島から3年前に頂きました。被爆イチョウの苗木の種です。まず、種を頂いたときにその種を育ててどうしたらいいかということを考えました。やはり子どもたちを巻き込んで、そしてこの問題について考えてほしいと考えました。そこで、教育プロジェクトにしたいと思いました。マンチェスターの6校で子どもたちが絵を描いたり、詩を書いたりして、広島、長崎で起きたことを学びました。そして、自然の大切さと原爆からの復興の大切さについても学びました。この2つの作品がプロジェクトで優秀賞となりました。展示を行い、賞状を渡しました。

そして、広島、長崎被爆70周年のときに、マンチェスターの美術館で原爆展を行いました。そのときに子どもたちもやってきて、広島、長崎で何が起きたかということ学ぶ機会を設けました。広

島市は、これは素晴らしいプロジェクトだと言ってくださいました。マンチェスターに広島市長が来られました。そして、子ども自身が、自分たちが描いた絵や詩について、自分にとって平和はどういったものかについて、広島市長、マンチェスター市長に説明しました。

私たちのまちにはラザフォード研究所があります。マンチェスター大学の研究所で、原子の核分裂が実験されたところでした。ですから、核の時代の幕開けと非常に強い関係があるまちでした。マンチェスターの子どもたちと広島、原爆はつながりがあるということ子どもたち自身も自覚できた素晴らしいイベントになったと思います。

これからもこのプロジェクトは続けていきます。広島の被爆者の方お二人が1週間、英国を訪問されました。英国・スコットランドの議員と会い、マンチェスターでは子どもたちに被爆の経験を話してくださいました。被爆されたところは子どもたちと同じような年齢であったということで、たくさんの質問が子どもたちから出ました。マンチェスターの子どもたちは、自分たちが学校に戻ったら何ができるかという議論を盛んに行いました。

被爆者の方が子どもたちと会っている様子とマンチェスターで育てられている種を見ている写真です。

最後に一言。今年5月25日、アリアナ・グランデのコンサートのときに爆弾が爆発し、22名が亡くなりました。その多くが皆さんと同じ年頃の若い人たちでした。大きなショックとなりました。たくさんのお花が捧げてあります。その爆発事件があった場所です。全て乾かされて遺族に渡す予定です。

マンチェスターには強い精神があると思っています。誇り高い街で、コミュニティを主体にした街で、そして世界各地からの人たちが暮らす国際都市です。

マンチェスターはより平和な世界を希求しています。そして、今回の爆破事件の発生前から、ずっと平和活動に取り組んできました。いろいろな宗教の人たち、若い人たち、政治家が集まって、「私たちは連帯して、世界の平和を願う」という声を上げました。

短いプレゼンテーションでしたが、マンチェスターがどのようなことをやってきたか、平和教育について主に話をしました。そして、ヨーロッパの6都市と一緒に開発した「市中心部平和トレイル」です。詳細の情報については名刺を頂ければお送りすることができますと思います。ありがとうございました。

中村 桂子 (長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授) : ありがとうございました。続きまして、スペイン・グラノラズ市の取り組み事例について、ジョセフ・マヨラル市長に発表をお願いいたします。短い時間となり、大変恐縮ではありますが、7分間の発表時間であれば幸いです。

ジョセフ・マヨラル (グラノラズ市長・スペイン) : 皆さま方、こんにちは。第一にこのような場に私を呼んでいただきまして、皆さま方の前で話しできることをとても光榮に思っています。また、田上市長、今日は素晴らしいお話を聞かせていただきました。本当に心を打つような素晴らしいスピーチでした。心より感謝申し上げます。



会議Ⅲ

私の方からもう一つお礼を申し上げたいのは、このような若い人とお話をする機会をつくっていただけたことだと思います。若い人たちには、将来というものがありますので、とても重要な機会になります。

(以下スライド併用)

私の市であるグラノラズは、バルセロナの東に位置する7万人ぐらいの都市ですが、平和というものに対して非常に責任感を持っている市です。歴史的に非常に辛い経験をしたからです。

スペイン市民戦争の間、1938年5月31日、そのときの人口はわずか1万2,000人だったのにもかかわらず、これらの写真が示すように、1分間に二百何十人という人が亡くなり、まちが破壊されたのです。そのときのイタリアの首相はベニート・ムッソリーニでした。ムッソリーニ首相は、このような破壊を私たちにもたらした張本人の一人でもありました。私たちの都市は灰と化してしまいました。そして、市民は血を流し、亡くなった方やけがをした人もたくさんいました。ですので、私たちはこの悲惨な歴史を踏まえ、将来に平和の重要性を伝えていく責任を感じています。空爆というものがどのように恐ろしいものを引き起こすのかを、私たちは言葉を通じて皆さま方に伝えていかなければいけないという使命を抱えています。

ここに四つの私たちの行動指針が書いてあります。最初は、歴史的な記憶を取り戻す、そして、それを保存していくことです。ご存じですか。40年間、スペインは独裁政治の下でこのようなことを語るできませんでした。この市民戦争を経て独裁政治になるまでの私たちの悲惨な歴史は封印されてきたのです。ですから、この封印された歴史の記憶を取り戻し、次世代に広島や長崎の人たちが伝えていくように、私たちは1938年5月31日に起こった悲惨なこの歴史を伝える作業をしています。

このように、記念式典にはたくさんの人が墓地に集い、花を捧げます。

また、私たちは、平和記念資料館の建設を考えています。その展示を通じて私たちの悲惨な歴史を伝えていかなければならないと考えています。私たちは空爆から自分の身を守るためにつくった防空壕を再現したり、特に爆撃が激しかった場所を特定したりしながら、赤十字の人間などが、子どもたちにどのように爆弾が落ち、どのようにまちが破壊され、どのように市民が亡くなっていったのかを説明したいと思っています。このように語り部がいます。彼ら、彼女たちは都市がどのように破壊されてきたのかという話を次世代に伝えていこうとしています。

そして、私たちは都市の外交をとっても重要と考えています。都市の力は弱いけれど、それをつなげていくことによってグローバルな問題にも対応できる力があるのだということです。私たちはネットワークを通じ、都市の声を上げていこうという働きをしています。

また、一つのプログラムとして、はっきり平和に責任を持つのだということを私たちの全て行動の

指針の中に入れてあります。私たちは地方政府の人間として、市民として、全部が力を合わせて、平和教育、平和のための責任を果たしていくのだということをいつも強く考えています。

そして、四つ目です。これは教育の重要性です。この教育というのは、平和のための教育です。教育は重要です。私たちは、教育によってしか都市や市民を変えることはできないと思っています。

七つの行動というものがあります。使命として、私たちはこの七つの行動をもって平和教育を進めていきます。まずは、子どもたちに対する平和教育です。そして、何がこの都市で起こったのか、悲惨な爆撃の歴史を皆さんに語り継いでいくことです。また、どのようにして爆撃が起こっていったのか、市民はどのようにしてこの防空壕に逃げたのか、どのようにして逃げ遅れた人たちが殺されてきたのかという歴史を語り継いでいくことです。

長崎と広島のと被爆者と同じように、グラノラズ市にも、空爆を生き延びた方たちがいます。ですので、私たちはそのような戦争の証言者、おばあちゃん、おじいちゃんから親に、そして親から子どもたちへというように、新しい世代に語り継いでいくことにより、いつも開かれた都市を継承するまちをつくり上げていきます。

その次に重要なことは、国際交流です。この国際交流では、文化交流を通じて世界中の学生と交流することによって、若者の市民のネットワークづくりを行います。

また、学校の中、教育の場において、1938年5月31日の爆撃を忘れないための活動を続けています。子どもたちが、空爆に遭ってまちが破壊されたという私たちのアイデンティティがあるからこそ、平和をもって前に進むのだという決意を新たにする日でもあります。

また、子どもたち、若者、成人、高齢者、その全ての年代の人たちが一緒に交流をし、新しい文化をつくっていく。つまり、平和の文化をつくっていくということです。

演劇やコンサートなどの芸術的手段を通じて、生きていく喜び、私たちの考えていたこと、空爆され街を破壊された市民の歴史を若者に伝えていくという教育をしています。

今お話したことは、私たちがやっている活動の核心にすぎず、もっと細かい活動もしています。私はここで皆さまにお話したいのは、私たちは常に戦って平和を勝ち取っていかなければならないということです。社会的な文化としても戦っていかねばなりません。私たちのアイデンティティは戦って勝ち取っていくものなのです。「Peace」という言葉は、私たちの教育の一番根幹を成すものです。平和の文化は、私たちが行っているいろいろな文化のプログラムの中核を必ず成すものです。それこそが私たちがより良い世界を構築するための一つの重要な鍵となります。ありがとうございました。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：最後に、広島市立広島商業高校と長崎市立長



会議Ⅲ

崎商業高校の取り組み事例の発表を両校の生徒さんからお願いします。

(以下スライド併用)

江上 健太 (長崎市立長崎商業高等学校生徒会長)：私たち長崎市立長崎商業高等学校、広島市立広島商業高等学校の2校は、どちらも被爆地の市立商業高校であることをきっかけに、平成19年度から交流が始まり、平成21年度には姉妹校になりました。毎年、8月6日と8月9日にはお互いの学校を訪問し、これまでに「長崎平和の鐘」と「広島平和の鐘」を贈り合うなどして親交を深めてきました。

その中でも、私たちが大切に受け継いでいるのは、平成19年度につくった「広島市商・長崎商業共同平和宣言」です。それでは、今からそれぞれの学校で行っている「平和への取り組み」について発表します。

阿部 更紗 (広島市商ピースデパート取締役社長)：最初に、私たち広島市立広島商業高等学校が行っている取り組みを四つ紹介します。

一つ目は、今年で第11回を迎える「広島市商ピースデパート」です。全国各地で学校デパートは開催されていますが、学校デパートの冠にピースが付いているのは、「広島市商ピースデパート」だけです。デパートの開催理念には「商業活動を通しての平和貢献」という文言が記されています。また、デパートの利益の一部は広島、長崎の平和事業に寄付しています。

二つ目は、生徒が教員役を務めて学習をするという独自の「平和探求学習」です。生徒個々が次代の語り部としての自覚を持つことを目的とした試みです。一番の特色は、2年次において、姉妹校である長崎市立長崎商業高等学校の歴史や長崎における原爆被害などを学び、長崎というフィルターを通して平和を考える時間を設けていることです。

近藤 風樺 (広島市立広島商業高等学校生徒会長)：三つ目は、長崎商業から寄贈された長崎平和の鐘に込める形でスタートした「広島平和の鐘 寄贈プロジェクト」です。これは8月6日に平和記念式典で鳴らされる広島平和の鐘のレプリカを、平和を共に築く仲間に贈るプロジェクトです。私たちはその鐘に刻まれている「平和」の文字を「希望」とし、その揮毫(きごう)を松井一實広島市長にお願いしました。この鐘は、これまでに長崎商業、東日本大震災による津波のため生徒・教職員が犠牲となった宮城県石巻市立石巻女子商業(現：桜坂高校)に寄贈しています。

四つ目は、地域やNPO法人と一緒にやる平和活動です。「はだしのゲンの麦プロジェクト」はNPO法人「一念発起」の活動に賛同したことから5年前にスタートしました。その活動を通して、広島市立矢野南小学校の広島市商ピースデパートへの参加が始まるなど、多くの成果を上げています。

また、NPO法人「HPS国際ボランティア」とは、小学校、中学校に寄贈する平和教材の作成を折り鶴再生紙を活用して行いました。この取り組みが広島市で最初の折り鶴再生紙を用いた卒業証書の実現に発展していきました。



江上 健太（長崎市立長崎商業高等学校生徒会長）：続いて、長崎商業高等学校の活動について発表します。一つ目は、2年前の創立130周年記念式典で行った「伝統継承セレモニー」です。明治18年に創設されてから、原爆の惨劇を乗り越え、現在に至る歴史をナレーションと映像で伝えました。そこに登場したのは、提灯やぐらを担いだ生徒たちです。130年の歴史を130個の提灯で表しました。やぐらの制作から当日のナレーションに至るまで生徒が務め、最後は、式典に集まった1,500の人々の前で、当時の生徒会長が、平和と自由を愛する先輩方の思いを受け継ぐ「誓いのことば」を表明しました。

岩本 花乃（長崎市立長崎商業高等学校生徒会総務・文化委員会委員長）：二つ目は、演劇部の取り組みです。このスライドは、終戦して間もなく長崎新聞に掲載された記事です。「長崎商業学校の生徒及び保護者に告ぐ。9月20日より、市内中和寮において授業を行う」つまり、原爆が落とされたあの日から、たった42日後に授業が再開されたのです。その事実を知った演劇部は、当時を知る先輩方に取材してオリジナル脚本をつくり上げました。タイトルは、「ひかり—始まりの教室—」。

劇の主人公は、戦争で生き残ったことを責める男性教師です。しかし、授業が再開されることを望む人々の思いが、彼の心を動かします。「生きとるもんは、一生懸命生きんばいかんやろうが」。この言葉は、主人公を励ます母の言葉です。この演劇は、県の演劇コンクールで入賞し、全校生徒の前でも上演されました。

三つ目は、文化祭のオープニング企画「巨大影絵パフォーマンス」です。3年前から始まった企画で、初年度のタイトルは「A beam of hopes ～希望の光～」。横8m、縦4mの大きなスクリーンをつくり、戦争を生き抜いた男女のストーリーを演じました。伝えなかったのは、教室が未来につながる希望の場所だと考えた先輩方の熱い思いと、今を生きる幸せです。この企画は演出を変えて受け継ぎ、今年も秋の文化祭に向けて検討中です。

このように、私たちは、学校行事や部活動といったさまざまな機会を捉えて、戦争当時に思いを馳せながら、希望ある未来を想像するという取り組みを行っています。

江上 健太（長崎市立長崎商業高等学校生徒会長）：最後に、まとめとして8月9日に実施の平和集会について紹介します。この日、私たちは、平和への思いを新たにするために、毎年、平和を祈る演奏や全員合唱を行うとともに、「広島市商・長崎商業 共同平和宣言」を表明しています。

阿部 更紗（広島市商ピースデパート取締役社長）：高校生としてできることには限りがあるかもしれませんが、広島市、長崎市の高校生として、全力で平和の心を発信していきます。

結びに、両校の交流のきっかけとなった「共同平和宣言」を読み上げます。

両校全員：(1) 私たちは、相互の被爆体験を学び合い共有していきます。(2) 私たちは、共有した被爆体験を次世代に語り継ぎます。(3) 私たちは、ヒロシマ・ナガサキから核兵器廃絶の声を世界に向けて発信していきます。



会議Ⅲ

江上 健太（長崎市立長崎商業高等学校生徒会長）：ご清聴ありがとうございました。

②若者の活動事例発表

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：ありがとうございました。続きまして、後半のグループワークに参加する若者のうち、一部の所属団体に関する事例発表に移りたいと思います。まず、ナガサキ・ユース代表団の取り組み事例の発表をお願いします。

（以下スライド併用）

山田 ゆり（ナガサキ・ユース代表団）：こんにちは。ナガサキ・ユース代表団5期生の山田ゆりと申します。これから皆さんにナガサキ・ユース代表団についてご紹介いたします。

ナガサキ・ユース代表団とは、長崎県、長崎市、長崎大学の三者で構成される核兵器廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）による人材育成プロジェクトの一環です。長崎の若者が核問題に関わる国際会議に参加し、最新の国際情勢を学び、この分野で活躍する世界の人々との出会いを通し、「知識を行動に結び付ける力」を養っていきます。ナガサキ・ユース代表団は2013年にスタートし、今年で5年たちます。

ナガサキ・ユース代表団の特徴は主に四つあります。一つ目に特色あるメンバーが集まるといことです。ユース代表団のメンバーは異なるバックグラウンドを持っており、一つの物事をさまざまな視点で捉えることができます。

二つ目に核情勢の最前線へ行けることです。実際に会議の場に参加してみると、核の専門家や各国政府の方と直接お話することができ、より理解を深めることができます。

三つ目に国際的な視点を身に付けられることです。各国のそれぞれの核問題に対する立場を理解することで、世界情勢に対して幅広い視点が身に付けられます。

そして、何よりも「やりたい」を形にすることができることです。核廃絶のために自分たちで何かできることをやりたいという思いがメンバーそれぞれにあります。ナガサキ・ユース代表団では、行動に移せば移すほどより多くのチャンスを得ることができます。

私たちの活動のメインは、5月に開催されたNPT再検討会議第1回準備委員会への参加ですが、その会議に向けて日々勉強を積み重ねました。そして今年5月、私たちはウィーンで行われたNPT再検討会議第1回準備委員会に参加してきました。その会議では190カ国以上の国の政府代表の方々によって、核軍縮や核不拡散、核の平和利用について話し合わせ、政府代表団の方々の近くで会議傍聴ができ、雰囲気の間近で感じることができました。

会議の他にも政府、NGO関係者との意見交換や国際機関を訪問したり、ウィーン日本人学校で核兵器に関する出前講座を行ったり、韓国の大学生と共同で国連内でワークショップを開いたりもしました。

今回の経験を通して、核兵器が二度と使われないよう自分たちはこれからどう関わっていくべきなのかを本当に考えさせられ、現在、それを基に、長崎県内外の小中学生に、ピース・キャラバンと呼

ばれる核問題に関する出前講座も行っています。

これからもさまざまな方法で、若い私たちから核兵器のない世界を目指して頑張っていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：ありがとうございました。続きまして、高校生平和大使の取り組み事例の発表をお願いします。

（以下スライド併用）

安野 伊万里（高校生平和大使）：皆さんこんにちは。私たちは核兵器の廃絶と平和な世界の実現を目指して活動している高校生平和大使です。高校生平和大使は、1998年のNPTに加盟していないインドとパキスタンの核実験をきっかけに始まり、今年で20年目を迎えます。

私、安野伊万里と関口萌は、第19代高校生平和大使として、昨年8月にスイス・ジュネーブにある国連欧州本部を訪問しました。軍縮本会議では3回目となるスピーチを代表が行いました。その後、軍縮局を訪れ、軍縮局長代行のメアリー・ソリマンさんに向けて、平和大使一人一人が核廃絶へのスピーチを行いました。私は、長崎原爆を象徴する黒焦げの少年の写真を使って原爆の非人道性を訴えました。

関口 萌（高校生平和大使）：ところで、私たち高校生平和大使は、高校生1万人署名活動にも所属しており、長崎では毎週日曜日に2時間街頭で署名を集めています。そこで集めた署名を高校生平和大使が国連へ提出します。昨年1年間で集めた署名は12万5,314筆、18年間の累計で146万2,912筆の署名を集めました。それらは国連で永久保存されています。

国連訪問を終えてからは、日本各地に出向いての活動報告や長崎に修学旅行に来る学生と交流などを行い、平和の種まきをしています。「微力だけど無力じゃない」というスローガンの下、活動を全国各地、世界各国に広げています。ご清聴ありがとうございました。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：ありがとうございました。最後に、京都外国語大学（NET-GTAS）の取り組み事例の発表をお願いします。

阿比留 高広（京都外国語大学）：皆さん、こんにちは。京都から参りました阿比留といいます。アビーと呼んでください。

（以下スライド併用）

私たちは、NET-GTASで活動しています。英語では、The Network of Translators for the Globalization of the Testimonies of Atomic Bombs Survivorsです。日本語では、被爆者証言の世界化ネットワークといいます。



会議Ⅲ

被爆の実相というものを知るためには、当事者の声が非常に重要だと思います。原爆の当事者というのは被爆者の方々です。被爆者の方々は、たくさんの証言を残しています。しかし、そのほとんどは日本語だけです。

多くの他の海外の方々はそれを理解することが非常に難しいです。広島、長崎に原爆が落とされたということは知っていても、被爆の実相はどうだったのかということは、ほとんどが知らないままです。言葉の壁をどうしても乗り越えなくてははいけません。

そこで私たちは、彼らの証言を日本語から多言語、他の言語、たくさんの言語に翻訳して、世界に発信するという活動をしています。当事者の方々の声を基に、被爆の実相を世界中に広めようという活動をしています。

私たちはこれまで88本の証言ビデオ、18人の被爆者、13言語の翻訳をしてきました。私たちは京都という日本の都市で活動しています。京都をご存じでしょうか。広島や長崎だけでなく、京都という日本の他の都市でこういった活動がされているということは非常に重要なことだと思います。

また、海外の大学とも連携しています。例えば、ドイツのボン大学では、被爆者の証言の翻訳を授業で行っています。また、その後に、学内で発表会なども行っています。このように、日本各地だけでなく、世界各地でこういった翻訳活動が広がっていくことが、私たちは非常に重要だと思っています。それぞれの地域で、それぞれの地元の言語で翻訳がされれば、NET-GTASは要らなくなります。必要ないようにしてほしいぐらいです。

平和首長会議というのは国連とは違い、国の概念で分断されずに、それぞれの地元の魅力やつながりで平和をつくっていかうとする、世界でも非常に先進的なコミュニティだと思います。そこで、私たちは一つ皆さんに提案があります。

皆さんの地元、それぞれの都市で、一人でもいいので、一つでもいいので、被爆者の証言を日本語からあなた方の言語に翻訳していただけないでしょうか。あなた方の地元の言語でそれぞれの状況に応じて被爆の実相を広げることができます。平和な世界に近づくことができると思います。それが平和首長会議の強みで、何百、何千の都市に翻訳活動が広がっていけば、本当に世界を変えることができるのではないかと私たちは思っています。

翻訳という本当に地味な作業ですが、これによって生み出される本当に小さいけれど大事な平和の種を皆さんの地元でもまいてみてはいかがでしょうか。以上です。

(3) 第2部

①グループワーク

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：ありがとうございました。それでは、引き続きグループワークを行います。皆さんにグループワークについてご説明したいと思います。お手元の資料の中に、グループ編成表が入っていますので、併せてご覧ください。

グループは、A班からF班まで六つあります。全国から集まった大学生、高校生、留学生、それから社会人で構成されています。後ほど、グループメンバーについてはそれぞれ紹介させていただきますので、お待ちください。

今日、A班と一緒にグループワークをしていただくのは、東京都武蔵野市の邑上守正市長です。B班は、フランス、ヴィトリー・スールセーヌ市のジャン・クロード・ケネディ市長です。C班は、ベルギーのイーペル市、フィリップ・ディーガー平和部局長です。D班は、メキシコ、メキシコシティ市のマリア・フェルナンダ・オルベラ・カブレラ青少年局長です。E班は、カメルーン、フォンゴ・トンゴ市のジーン・ポール・ナンファック副市長です。F班は、クロアチアのビオグラード・ナ・モル市のヤスミンカ・バリョ参事官です。

今ここに集まっている学生たちは、今日まで約3週間にわたって担当の自治体について調査を行ってまいりました。そして、調査を行ったことに基づき、企画案づくりを行ってきました。もちろんここに集まっている若者たちは皆、長崎の出身ではありません。従って議論の多くはメールやLINEの電話会議、スカイプなどを通じて行われ、いろいろな形でこれまでコミュニケーションを取ってきました。

また、それぞれの自治体に直接メールで質問を投げ掛けて答えをもらうという形でもコミュニケーションを進めてきました。これまで3週間の努力を基に、それぞれの班で自治体の皆さんにこれまで練り上げてきた企画案のプレゼンをし、アドバイスを受けながら最終案の形にまとめていきます。企画案は短期、中長期の二つのカテゴリーに分けて議論を行っていきます。短期の案は、次回平和首長会議総会までに実現することを目指しています。最終案は、模造紙にまとめて最後にそれぞれの班から発表を行います。

さあ、各班の皆さん、いかがでしょうか。準備はできていますか。昨日、一昨日にレセプション等で自治体の首長さんと直接会ってご挨拶をさせていただく機会があった班もあります。しかし、今日初めましての班もあります。言語も異なります。バックグラウンドも異なります。いろいろな中でこれからグループワークを行っていきますが、何が出てくるか、わくわくの企画がここから始まっています。

—グループワーク—

②各グループからの立案発表

B班発表

鎌倉 翼 (明治大学)：皆さん、こんにちは。私たちはフランスのヴィトリー・スールセーヌ市を担当しているB班です。私はリーダーではありませんが、ファシリテーターをさせていただきます。二つ案があるので、その二つを皆さんと共有できたらと思いますので、どうぞご清聴をお願いします。そして、共に平和な世界をつくり上げましょう。

まず、一つ目の短期的な案について発表させていただきます。川瀬さん、よろしくをお願いします。

川瀬 由希子 (京都外国語大学)：一つ目の短期的な案の題名がフランス語で「la paix d'ici」、英語で「peace from here」です。このプロジェクトの一つ目の目的はフランスのヴィトリー市での拠点づくり



会議Ⅲ

で、二つ目の目的が平和への入り口づくりです。この案は、フランスのヴィトリー市に提案したのですが、フランスのヴィトリー市だけではなく、全世界の都市に適用できる案だと思っています。

私たちが考えたのは、スペースとなる場所をつくって、そこでワークショップをすることです。1日のプロジェクトで、まず1時間ぐらいのワークショップをして、一緒にランチを食べて、その後、映画鑑賞をします。映画を共有した後に、参加者たちに自分の思う平和を絵で表現してもらいたと思っています。その表現してもらった絵は持って帰ったり捨てたりするのではなく、その拠点となる場所に飾って、その絵をたくさん集めていきたいと思っています。この短期的な案で得られる効果は、一つ目は、1日だけのプログラムなので、簡単に気軽に参加できることです。二つ目は、ヴィトリー市で平和を考える拠点をつくれることです。このプログラムの最終ゴールは、プレハブだったり、その会場がまちの一部となり、人々にとって平和について考えることが日常的になることです。これで一つ目の短期の案の発表を終わります。

鎌倉 巽 (明治大学) : 続きまして、中長期的に将来につなげていける大きなプランを提案します。私たちはこの企画、提案に信念を持ってしっかりと提案させていただきます。私たちが掲げる大きなイベントは、「ピースムービーワールドコンテスト・イン・ヴィトリー・スールセヌ」です。皆さんご存じのように、カンヌ国際映画祭などがありますが、平和についてのムービーコンテストを世界規模で行い、それをヴィトリー・スールセヌを中心地として開催しようというものです。ワールドコンテストなので、ピースについての考え方をボーダレスシェアしていくことができます。また、どういったムービーをつくるかということですが、主体となって作成を行うのは高校生、大学生で、ヴィトリー・スールセヌの学生と日本の学生がコラボします。そして、ムービーは30秒ほどで平和を訴えるショートムービーであり、それをFacebook、Twitter、YouTubeなどに上げ、世界中の人々が気軽に動画を見て、どの動画が一番良かったのか投票するという形になります。こうしたことの中で、ただピースムービーをつくるのではなく、僕たちは平和教育に力を置きます。

福井 敦巳 (長崎大学) : では、その平和教育の流れについて説明していきたいと思います。まず、平和教育の流れとして、過去の問題にフォーカスを当てたいと思います。過去の問題としては、広島と長崎において何があったのか、被爆の実相について知ってもらいたいです。そのための活動として、資料館の訪問や被爆者証言を聞くという活動を行います。次に、現代の問題にフォーカスを当てます。核の問題は現代も続いているので、今の核の数、核の威力、核軍縮・廃絶に向けた世界的な流れ、核兵器禁止条約など、核の現代の問題について知る核の基礎セミナーを開きたいと思っています。最後に未来に向けた活動として、ピースムービーの作成を行います。ピースムービーはグループで作成し、ディスカッションを通してお互いの平和についての考えを共有する場にしたいと思っています。

最終的な目標は、平和の伝承者の育成です。フランスのヴィトリー・スールセヌ市は今まで平和に向けていろいろな活動を行ってきましたが、平和教育という点に関しては、まだ踏み入れられていない状況があるので、それを行うために広島、長崎において何があったのかを伝承できる人材を育てたいと思いました。このようなトレーニングプログラムを通して、平和の伝承者の育成を行いたいと

考えています。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：B班、ありがとうございました。それでは、A班の皆さん、準備をお願いいたします。議論のたくさんの内容を発表するのに5分という時間は短いとは思いますが、ぜひ時間厳守でお願いします。

A班発表

野村 梨紗（長崎大学）：私たちA班の提案は、平和のたまり場をつくることです。これは若者による若者のための、若い人たちが気楽に参加でき、互いに刺激し合える場所です。この「垣根をなくして」というのは、市長さんが付けてくれました。

柴田 進志（長崎大学）：現代の日本、そして武蔵野市が抱えている平和に関する学習の問題として挙げられているのが、若者がイベントにほとんど参加してくれない、堅い雰囲気や難しい内容、聞きづらい内容であるということが挙げられます。さらに、教育が受け身で、日本の教育にありがちな点ではありますが、自ら率先してやるアクティブラーニングが大切ではないかと考えました。それに対してできることとして、若者が平和について気軽に考えられるきっかけになる場をつくるのが大切であろうと。さらに、平和について考えるだけでなく、お互いのことを知るという面で国際協力、その相互理解です。平和を考えることは、未来を考えることとも等しい、未来を考えることが将来の平和につながるということで、気軽に考える場を提供する、そして国際交流、未来を考えるということが大切なことであると僕たちの班では考えました。

具体的にそれを考えた上で、どのようなことができるのかを次のページにまとめました。ご覧ください。

川嶋 大地（明治大学）：では、次は企画でどういうことをしていこうかという、具体的なことについて話したいと思います。企画の内容は、武蔵野市にゆかりのある若者、特に大学生を中心とした若者と留学生による団体を、市による募集で組織するということです。武蔵野市の特色として、たくさん大学のキャンパスがあります。特にその中でも武蔵野美術大学は芸術に特化している、亜細亜大学にはたくさんの留学生がいるという長所があります。そのような、融合のようなことをやっていきたいと思っています。

例えば、この団体が考える企画に武蔵野市の特色を取り込みます。武蔵野市には吉祥寺があり、吉祥寺は東京で住みたいまちナンバー1というデータもあります。吉祥寺はアニメシティといい、アニメを取り入れた活動も行っているのも、そのような現在ある活動と新たに自分たちが考えたこの組織で、コラボレーションではないですが、一緒に企画をつくり上げていきます。

若者のニーズに合ったイベントを考えるという面では、今、僕たちは若者にしか考えられないということを念頭に活動していかなければいけないということがあります。例えば、武蔵野美術大学の学



会議Ⅲ

生と一緒に武蔵野市民が平和についての作品をつくりあげたり、武蔵野美術大学の学生の作品を囲みながらみんなで平和について語り合うなど、気楽にかつ若者が主体となって活動できるような場所を提供していきたいということを僕たち A 班は思いました。

柴田 進志 (長崎大学)：現在あるものに加えて、若者が今回取り組みやすいものということに焦点を当てて取り組みました。これで発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

中村 桂子 (長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授)：A 班、ありがとうございました。続きまして、F 班の発表に移りたいと思います。F 班の皆さん、よろしくお祈いします。始めるときに、自分の担当都市がどこかということももう一度繰り返してお祈いします。

F 班発表

中川 哲 (長崎大学)：F 班はクロアチアのピオグラード・ナ・モル市の担当で、この市の一番の特徴は、海に囲まれている観光地ということでした。この写真でも分かるように、たくさんきれいな家があり、船がたくさん泊まっいてという特徴的なまちです。このまちの良さを生かしたイベントをしたいということで、まち全体で平和を象徴する日、平和を象徴する時間をつくらうと思うことで、イベントを企画しました。それぞれについて詳しく説明してもらいます。

渡部 遥菜 (明治大学)：クロアチアのピオグラード・ナ・モル市を平和の象徴のまちにするために、私たちはステップを四つ考えました。ステップ1は事前学習、ステップ2はまちをデコレーションする、ステップ3はイベントを開催する、ステップ4はポストカードを他のまちに送るというものです。これから一つ一つのステップについて説明させていただきます。

ステップ1については、このイベントでは高校生や中学生に主体性を持たせたいと考えていたため、学校で平和教育を行うというものを考えていました。しかし、ピオグラード市では既にこの事前学習は行っているということなので、ステップ1についてはもうクリアしています。

ステップ2のまちをデコレーションについては、平和の象徴のまちにするために、まち全体をデコレーションすることを考えています。その方法は、海辺のまちを風船で飾り付けたり、ストリートにチョークでアートをつくったりするというものです。その風船にはこちらの平和のマークを付けたりなど、一体感を持たせるようにと考えています。

安野 伊万里 (長崎東高等学校)：ステップ3はイベントを開催することです。展示会や被爆証言を考えていましたが、既にピオグラード市ではこのイベントが行われているため、これを継続していくことを提唱します。

二つ目は、ランタンで自分たちの平和の祈りを示すことです。このランタンの平和のともじびでピオグラード市を包むことで、まち全体が平和の象徴であるということを示すことができると思っています。

三つ目は、海が有名なビオグラード市なので、ヨットの明かりでシンボルマークを形づくることです。ヨットの明かりを出すところの候補地としては、この港は船がとてたくさん泊まっていてヨットを出すことができないと思うので、この広い海でやろうと考えています。このシンボルマークは、もとのビオグラード市のマークは青い大きなハートの中にBという文字が書いてあるのですが、それをアレンジして平和のためのマークにしました。このハートがなぜ青いのかというと、ビオグラード市が海で有名だからです。

このようなイベントを通して、ビオグラード市で平和を考える日というものをつくり、平和の象徴のまちにしようと思います。

アマンダ・マクドナルド（長崎県立大学シーボルト校）：これに関してまずは、このシンボルを使って、そしてこのところで写真を使い、そこからポストカードをつくるということです。ポストカードに関しては、ここに書いているような形で、小さいまちであっても小さいステップが協力することによって大きな形になるということです。小さいまちが小さいことをみんなですれば大きな変化が生まれるという意味です。

これをポストカードに書いて、他の都市にも送るということを考えています。平和のメッセージを送り、平和首長会議にも参加していただきたいと考えています。これによってビオグラードのみならず、他の都市にもこれを波及していくことができると考えています。

高橋 悠太（盈進高等学校）：さまざまなイベントがありますが、これは若者主体でやらなければならないと思っています。これは義務だと思っています。それは、これから未来をつくるのは私たちだからです。今回、さまざまな企画をしましたが、例えば、長崎とビオグラード市で連携したときに、それぞれの都市で青年部会をつくる、学生の団体をつくることなどがとても重要だと思います。

一つ提案があります。ここに集まってくださっている、平和首長会議に賛同している全ての都市でそんな青年部会をつくりませんか。若者たちの団体をつくって、それぞれコネクトし合ってみませんか。これを僕たちが思いついたのは、実は今回の核兵器禁止条約の採択があるのです。これは実は被爆者の方々の運動、市民の連帯があつてここまで生まれてきました。本当に画期的なものだと思います。私たちの中にもそうした連帯、協力、そして市民の運動を広げていこうではありませんか。ご清聴ありがとうございました。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：F班の皆さん、ありがとうございました。では、続いてE班です。フォンゴ・トンゴ市です。準備の方をお願いします。

E 班発表

阿比留 高広（京都外国語大学）：フォンゴ・トンゴ市の発表を始めさせていただきます。私たちが最初にフォンゴ・トンゴ市を知ったときに、単純に驚きました。まず、どこの国か。カメルーンでフォンゴ・



会議Ⅲ

トンゴ、何のこっちゃとなりました。ウェブページで調べてもなかなか出てきません。どんなところか全く分からない状態で始まりました。ですから、一つの提案は、ウェブページをつくり、メインを写真にすることです。若い人たちがたくさん写真を撮っているの、それを上げるプラットフォームをつくれれば、たくさんの写真が集まってきます。例えば、長崎とフォンゴ・トンゴで共同で写真をアップするサイトをつくと面白いのではないかと、お互いを知るためにいいのではないかと思います。

北里 友佳 (長崎大学) : 次の2番は短期交換プログラムです。これは2～3週間の長崎とフォンゴ・トンゴの若者の交換プログラムを考えています。この交換プログラムはただの交換プログラムではなく、平和教育をベースとしたものです。例えば、長崎からフォンゴ・トンゴに向かう場合は、先ほど紹介にありましたように、長崎の学生があちらでピース・キャラバンを行ったり、また、実際にフォンゴ・トンゴに行くことによってフォンゴ・トンゴやカメルーンの文化や歴史をそこで感じ、学ぶことができるようになっていきます。フォンゴ・トンゴから長崎に来る場合は、実際に長崎という場所で被爆者の話を聞いたりすることで、被爆の実相を知ることができます。そして、日本でホームステイを通じて文化に触れ、また感じるようになっていきます。

3番目の new language course というのは2番と少しつながっていて、もし、これからどんどんもっと日本に興味がある学生が出てきたときに、フォンゴ・トンゴには大学があるので、そこで日本語のコースがあったらどうかという提案です。また、フォンゴ・トンゴに日本語のコースをつくるだけではなく、長崎大学の授業の一部にフォンゴ・トンゴあるいはカメルーンの言語文化を学ぶ授業を何か入れ込めないかと考えています。

阿比留 高広 (京都外国語大学) : その授業にも関連しますが、被爆者の言葉の翻訳をしてはどうかと思います。というのも、被爆者の言葉の翻訳をするためには、被爆者の情報だけではなく、心の奥まで読み取らなくてはいけないので、非常に勉強になるからです。それ自体が平和活動になると思います。

大月 慎太郎 (明治大学) : 最後になりますが、今までのこういった活動をただぼんと出されても現地の方は「何だこれは」とあまり反応してくれません。そこで、まず平和について少しでも知ってもらおう、きっかけをつくらうということでわれわれが考えたのが、Step to Peace プロジェクトです。これはドイツのつまずきの石に影響を受けて考えました。具体的な内容としては、メインストリートの一角のタイルの一部分をはがし、そこに金色の足形のモニュメントをはめこみます。人は光っているものを見ると、少し足が止まるではないですか。そこで、これは何だろうと見たところに書いてあるのが年号と都市の名前です。その都市の名前を見ても何か分からない。そこでARを使い、そのモニュメントを読み込むと、その都市で実際にあった紛争の被害や、「1945年8月9日長崎」だったら、原爆の実際の状況の音声や動画や写真などをそこで情報入手できるようにし、より知識を深めていけるような、そういうきっかけをつくれるようになればいいと思います。

自分たちの一步一步が平和につながっていく、一人一人が平和についての知識を深めていき、さらにはそれを他の国にも広めていく一歩になればいいという意味を込めてこのプロジェクトを考えま

した。以上です。ありがとうございました。

中村 桂子(長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授):E班、ありがとうございました。そうしましたら、D班の皆さん、準備をお願いします。

D班発表

山田 ゆり(ナガサキ・ユース代表団):D班では、「Semana de la Juventud por la Paz 2017」というイベントで行う内容について発表したいと思います。私たちは短期の企画として平和の日をつくろうと考えていたのですが、もうメキシコには「ピースウィーク」というものがあるらしく、短期のものではなく、いきなり中長期の企画になりました。このイベントは今年の2017年11月6日～12日の約6日間行われ、この目的は、平和のありがたみを感じて、より良い未来づくりについて考えることです。これはメキシコのソカロ広場で行おうということです。このソカロ広場は、メキシコの人たちにとってものすごく大切な場所で、世界有数のとても大きな広場の一つらしいです。

内容としては、国際問題などの被爆者からの講話で、それは簡単にイメージしやすいように映像なども使ってやっていきたいと思います。例えば、メキシコもスペインからの侵略などいろいろな歴史があるのですが、それについて専門家に話をしてもらったり、被爆者の方を呼び、その被爆体験を話してもらったりします。また、シリア難民など国際問題の話をしてもらいます。ちなみにメキシコにはメキシコ在住の被爆者の方がいらっしゃるので、その方をお呼びしてここで話ししてもらってもいいだろうということでした。

また、愛や人権問題、戦争に関する漫画や本、アニメの紹介、販売、映画の上映です。実際に映画の上映をされる予定らしいので、その中でこういったテーマのものを上映しようと考えています。

次に、親子と一緒に取り組めるワークショップを開催します。例えば、新聞じゃんけんゲームのグッズを一緒につくるなどです。グッズを一緒につくるというところでは、日本とメキシコのコンビネーションということで、親子で折り鶴をつくって、それを家に持って帰ってもらおうということを考えています。メキシコでは結構いじめが社会問題になっているらしく、親が子どもを殴ってしまったということも起こっているそうなので、社会の最小単位である家庭から平和をつくっていくということで、ここはすごく大切なのではないかと私たちの班では考えました。

次に、平和の大切さを訴える絵本、アニメの制作コンテストと、「あなたが見つけた外国」という、テーマとなる国とメキシコの違いについてビデオを作成するコンテストの二つのコンテストを行って、その最優秀賞の人たちには、他の国へ国際交流に行き、異文化交流をしてもらうという企画を立てています。そうすることで、他の国、異文化に対しての理解が深まり、より広い視野で物事を考える力を養うことができるのではないかと思います。

また、メキシコはカラフルでかわいいグッズがすごく有名だと聞きました。そこで、メキシコっぽい色などを使ったグッズの販売なども考えています。

それから、市長と話せるブースと言っていたのですが、市長はすごくオープンな方らしく、既にあ



会議Ⅲ

るとのことだったので、このまま継続してやっていってもらいたいと思っています。

ロゴを公募でつくることも考えていたのですが、実際にロゴがあるらしいので、また新しくかわいいものをつくってくださるようです。

平和に関するテーマソングをスペイン語でつくって歌う。今年11月にあるイベントは、フジロックフェスティバルのようにすごく大きなフェスティバルで、たくさんのミュージシャンなどに来てもらうそうなので、そこでそういったテーマソングなどを、今年は無理だと思いますが、今後考えていってほしいと思っています。イベントについてホームページやSNSでどんどん広報していただきたいと思っています。

取りあえず、皆さん、2017年11月6日～12日にメキシコであるので、よかったら行かれてください。以上です。ありがとうございました。

中村 桂子 (長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授):D班の皆さん、ありがとうございました。では、発表最後のグループです。C班です。最後のトリをC班に締めていただきたいと思います。

C班発表

洪 秀有基 (修道高等学校):皆さん、こんにちは。C班です。C班はベルギーのイーペル市の方に提案をします。ベルギーのイーペル市は、世界で初めて化学兵器が使われたところ。世界で初めて化学兵器が使われた都市と、長崎という原爆を落とされた都市、今回はその共通点を生かした計画を用意しています。今回は短期的計画としてピースフェスティバル、中長期的計画として交換留学の二つをご紹介します。

佐々木 朋哉 (長崎大学):この交換留学プログラムについて説明させていただきます。少し複雑になるので、集中して聞いてもらえればありがたいです。まず、これは二つに分かれています。スピーチコンテストをし、その後に優秀者3名を選び交換留学に行ってもらおうという形です。このスピーチコンテストでは、イーペルは化学兵器が世界で最初に使われた場所なので、それぞれ長崎の生徒はイーペルの化学兵器が使われたときの犠牲者に話を聞き、イーペルの生徒は長崎の被爆者に話を聞いた上で、スピーチの原稿をつくり、スピーチしてもらいます。それぞれの被爆者やイーペルの化学兵器が使われた悲劇的な歴史を経験した人から学び、自分で考えて、人に発信するということが可能です。

これによって選ばれた3名の生徒が、それぞれイーペルの生徒は長崎に8月9日周辺に、長崎の生徒はイーペルに化学兵器が使われた11月11日周辺に行きます。この交換留学が他と少し違うのは、現地の学生から授業を受けることです。現地の学生がそれぞれの歴史の教科書をつくって、それを用いて留学生に授業をします。この留学生が帰ったときに、今度はそのつくってもらった教科書を用いて自分の学校でそれを今度は伝えるという形で授業をします。

最後、これをどのように発展させるかについてです。

今、留学に行く前の話をしました。ここからは留学に行った後どのようにするかということをお伝えしていきたいと思っています。まず、先ほど留学に行くと言いました。留学に行った後に、現地の学生がつくった教科書を持って帰ります。その上で、その持って帰った教科書を使って母国で授業をするということをやりたいと思っています。それ以外には、その留学を通して何を感じたかなどをプレゼンテーションしていきたいと思っています。また、それ以外にも、記者会見等、スクールマガジンやウェブサイトなどを使って、学校の中だけではなく、一般市民など広く情報を広範囲に伝えていきたいと思っています。

岩田 直輝 (明治大学)：私からは短期的なピースフェスティバルについて説明させていただきます。まず、イーペル市では、3年周期でさまざまなお祭りが行われています。その中のお祭りの一つがこのピースフェスティバルということで、若者の皆さんにも来てもらえるような平和に関連したお祭りができたらと考えました。

下村 はず希 (立命館大学)：そのメインイベントとして、私たちは三つ提案しました。先にスピーチコンテストです。スピーチコンテストは、先ほど説明した交換留学で行ったスピーチコンテストの上位3名の人に来てもらってスピーチをしてもらうというものです。次に、アート作品を展示するというものです。一つ目に、ファットマンをつくって展示するというものです。ペットボトルなどを使って光を放って、そういうものを展示するというのを考えました。

二つ目に、ポピーの花を使ってオブジェをつくるなどして、そのフェスティバルを飾るというものです。ポピーの花はイーペル市の追悼を表す花ということだったので、そうしました。

酒井 環 (長崎純心大学)：最後に、ショートムービーについて説明させていただきます。単刀直入に言うと、この企画はイーペル市の方と話している途中で少し変化を加えた方がいいなという話になり、最終的には今回実現とはいきませんでした。内容としては、イーペル市と長崎市がネコがすごく有名なまちということでつながりがあったので、主人公をネコとした平和や核兵器についてのムービーがくれたらと思っていたのですが、やはり核兵器や平和というメッセージ性の重いものはネコという動物で表すより、被爆者の方たちが自分の心から話している言葉のように、人が話すことが一番重要なのではないかというイーペル市の方からのお話を聞いて、私たちも同感したので、ネコではなく、新しい人の心に訴えかけられるようなアプローチができたらと思っています。

田中 心 (活水高等学校)：最後のまとめを私がしたいと思います。実際にイーペル市長との議論を通して、このショートムービーのようになかなか実現できないというプランもありました。しかし、みんなで白熱して、出身や年齢の異なるメンバーなのですが、その分さまざまな観点からの意見を出して深めることができ、このようにまとめることができました。化学兵器の被害を受けたイーペル市、そして被爆地長崎、被爆国日本が手を結んでこのプランが実現できるよう、今回1回限りでなく、何回か交流を通してこのプランが実現できるように、これからも交流や平和活動を頑張っていきたいと



会議Ⅲ

思います。ありがとうございました。

③フロアとの質疑応答、コメント等

中村 桂子(長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授):各班の皆さん、ありがとうございました。グループでのプレゼンテーションは以上をもちまして終わりになります。ただ、一つだけせっかくの機会ですので、おいでになっているゲストの方から一つだけ質問を取りたいと思います。ぜひ、われこそという方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いできませんでしょうか。市民の方も多く来られていますが、自治体の首長、長崎以外の日本の各都市、また各国から来られた方、どうぞお一人、ご質問を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

では、ご質問はないようですので、こちらでこのセッションは終わりになりますが、本日、学生たちがたくさんつくった企画のほんのごくわずかしか発表することができていません。しかも大変駆け足になってしまったので、この模造紙の一部を明日展示をする形で、ぜひ参加者の皆さまに見ていただきたいと思います。また、先ほどお願いしましたが、今回の企画は、ここに来られているさまざまな自治体の皆さんに、実現に向けて若者と一緒に取り組みを進めていただきたいということを念頭に行っているものです。もし、こうした企画がやりたい、これは面白いという企画がありましたら、終了後の明日、学生たちに一言声を掛けていただければと思います。

今回、平和首長会議として非常にチャレンジングな企画を行いました。若者と自治体とのコラボレーション、ある種の化学反応がとても面白いものをつくっていったと思います。ここにおいでの方の広島市長、長崎市長は、次回もやろうと思われたか、あるいはこれは大変だなと思われたかは分かりませんが、新しいものをつくっていくことはとてもとても楽しいことなのです。こうした平和の取り組みは非常に重いテーマではありますが、新しいものをつくっていくエネルギーのある若い人たちと一緒にやる楽しみを自治体の皆さまにも共有していただけたのではないかと思います。

皆さん、長時間にわたりどうもありがとうございました。壇上の若者たち、そして自治体の皆さんにどうぞもう一度温かい拍手をお願いします。

壇上の皆さん、起立をお願いします。そして、大きな声で会場の皆さんに向けて「ありがとうございました」と言って終わりにしましょう。では、「せーの」と高橋君、言ってくれますか。

高橋 尚也(京都外国語大学):気を付け、礼、せーの。

全員:ありがとうございました。

中村 桂子(長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授):以上をもちまして、会議Ⅲを終了させていただきます。皆さま、ご協力どうもありがとうございました。なお、次のセッションは予定どおり4時30分開始を予定しているとのことです。よろしく願いいたします。つたない司会でしたが、皆さまご協力ありがとうございました。これからも若者たちを応援していきましょう。